

# 論 文 要 約

博士論文題目 「撰関期貴族社会における情報の流通と構造

—藤原実資と『小右記』を軸として—

氏 名 重田 香澄

本論文は、撰関期の貴族藤原実資とその日記『小右記』を軸に、特に一〇世紀後半から一一世紀前半の貴族社会における情報、中でも文字により生成・蓄積されていた公事情報に対する貴族たちの姿勢や、利用のあり方をとおして、当該期の公事情報の構造を分析し、それを通じて当該期の社会を考察するものである。

第一章及び補論一では、当該期、最も父祖の日記及び例への依存度が高いと認識されている藤原実資においてすら、官人も含めた貴族社会に共有される公事情報源としての律令格式・官撰儀式書、公日記類と、主に公卿の需要に応えるための私日記類という構造の中で文字情報を利用し、父祖の日記を単に過去の情報を抽出するために使うことの多さを示した。

第二章及び補論二においては、日記上に全文引用されることの多い勘文と、勘文の典拠となる割に撰関期古記録上での言及が少ない漢籍について検討した。撰関期の勘文は、手続き上不可欠であるゆえに情報としての正統性を有したが、前後の時代と比較すると、一連の手続きに関わる者以外は入手しにくい情報群であった。特に改元等、諸堂博士による勘文にその傾向が強い。これは平安前期の大学出身者による勘奏ではいずれも漢籍と国典を用いた議論がなされていたのに対し、院政期にはたとえば漢籍を引く明経道勘申と先例（外記日記）を引く外記勘申に分化していく動きと密接に関わるものと考えられる。

第三章では脩子内親王着裳における見解の相違をもとに、当該期に公事として固定されていった儀式における先例の適用論理の検討である。官撰典籍や公日記によって画される公事の枠組みの埒外となった場合には、主催者の方針に拠るところが大きくなる。

第四章は逆に、季御読経の巻数奏をとおして、貴族社会に共有されていた作法が、「一家例」、故実流派的なものへと読み替えられていく過程を検討し、一条朝前半の儀式の混乱期と道長による再整備期に小野宮流が「一家例」として口伝を読み替えていった可能性を指摘した。

第五章は、長和度大嘗会の運営と式文の作成過程を、公卿間の情報のやりとりをとおして考察したもので、藤原公任の叙述を支える公卿間の情報のやりとりを描写した。ここで観察されるような双方向的な情報のやりとりはこの時期くらいまでは確認されるが、道長薨去前後から公卿関係は実資に集約されるようになっていく。

第六章は、公事叙述中に頻出の「例」「儀」「説」と門流意識の結びつきから各語を叙述上に位置づけ、これらによって叙述される公事が、門流・家を問わず共有される部分と氏・家に帰する要素とのバランスの上に構成されること、時代が下るに随い後者の割合が増えて

いくこと、それに合わせるかのように、はじめ正誤・適否で評価判断されていた「説」に、門流意識が結びつき、家の特徴づけることばへと変化していくことを指摘した。

これに当該期の他の貴族の日記の傾向を考え合わせると、撰関期における公事情報の流通のありようは、一条朝の前半まで、寛弘期以降（道長執政期）、道長薨去後の三期に分けられる。

一条朝の前半までは、おおよそ藤原忠平によって整備された公事の体系の中で、官撰の典籍・公日記類を中心に、その運用に関わる情報も多くが共有されていた。そのため、細かいところでの説の分化はあっても、それは正誤／適否で判断される性質のものであり、それを可能にしていたのが基準としての官撰典籍・公日記類であった。

一条朝前半における廟堂構成員の目まぐるしい交替は、それまで共有されていた情報に混乱をもたらし、公事の適切な運営も容易ではなくなつたと考えられる。寛弘期以降、廟堂の首班となつた道長を中心に再構成を目指す中で、叢生する異説を門流で説明し、官撰典籍・公日記にない公事に私日記をあてるようになっていく。私日記の記述内容に対する信頼度は相対的に低いが、公日記の空隙を埋めるものとして、また門流ごとの説の根拠として、存在感を増していくことになる。

この時期には、実務官人層でも公卿層でも、複数の氏または門流、家がほぼ似たような条件で存在し、各層内では双方向的な公事情報の交換がおこなわれた。そして両者を太政官機構や行事所、本主家司関係等で繋ぐことで貴族社会全体の情報共有を可能としていた。

このような中で道長とそれに続く頼通の権力は固められていき、彼らを頂点とした秩序が形成されていくわけだが、これが公事情報の流通に大きく反映していくのが、実資が右大臣になり、更に道長が薨去した後である。安定した撰関（頼通）やそれと密に連絡を取る固定された一上（実資）、各層で突出した存在が撰関との関わりの中で形成され、その下に各家・氏が組織される。公事情報の流れもこれに沿うことになった。

院政期の撰関家を頂点とした家格と秩序は、周知のように、撰関期とそのまま接続するわけではない。しかし、頼通期に形成された、撰関へと公事情報が集約されていくような秩序は踏襲（維持）される。次代、この秩序を文字化した仕組みが「日記家」といえよう。